

後世に伝える

四国では周期的に南海地震が起こり、津波の襲来が繰り返されてきました。碑に津波の歴史や教訓を刻し、後世に伝える取り組みが各地で行われています。徳島県牟岐町と高知県須崎市の例をご紹介します。

■南海震災史碑（徳島県牟岐町）

昭和21年（1946）12月21日、南海地震とそれに伴う津波により、牟岐町では死者・行方不明51人、家屋被害1,774棟の他、漁船、漁具、田畑などに甚大な被害が発生しました。日頃から地震・津波に備えることの大切さを後世に伝えるため、昭和南海地震から50年目の平成8年（1996）12月21日に、大牟岐田の児童公園内に「牟岐町における南海震災史碑」が建立されました。裏面には、昭和南海地震による津波の状況とともに、白鳳年間（684年）の津波以来、正平（1361年）、慶長（1605年）、宝永（1707年）、安政（1854年）、昭和（1946年）と繰り返し牟岐町を襲ってきた津波の歴史が記録されています。＜牟岐町史編集委員会編「牟岐町史」1976年及び牟岐町教育委員会編「南海道地震津波の記録 海が吠えた日」1996年＞



■津波之碑（高知県須崎市）

昭和21年（1946）12月21日、南海地震に伴い津波が襲来しました。第一波の津波は地震発生後約10分で到達し、その後津波は20分位の周期で6、7回襲ったとされています。須崎市の被害は死者58人、行方不明3人、負傷者140人、家屋の全壊198戸、半壊563戸、流失168戸、浸水1,315戸、焼失9戸、田畑の浸水398町、船舶の流失683隻等に及びました。昭和40年（1965）に須崎橋交差点に「津波之碑」が建立されました。碑の裏面には、宝永4年（1707）の津波、昭和21年（1946）南海地震による津波、昭和35年のチリ津波（1960）の様子が記され、繰り返されてきた津波の恐ろしさを後世に伝えています。（須崎市史編纂委員会編「須崎市史」1974年及び須崎市編「南海・チリ一地震津波録 海からの警告」1995年）

